

原村の地域おこし協力隊が発行するかわらばんのことです。
原村で暮らす、おもしろくて素敵なひとを紹介します。



写真はプケコへ交流委員会のみなさん。ホームステイの為のハンドブック作成の様子。晴美さんは写真左から2番目。

「プケコへ交流委員会」 小林 晴美さん（66）

千葉県出身。結婚後、アメリカへ渡る。帰国してから、子育ては田舎でしたいとの思いから、ご主人の実家である茅野市へ移住。その後、原村に自分たちで家建て、住みはじめてからおよそ34年になる。

外を見ることは、同時に内を見ること。
自分自身や、自分の国と地域を知ることのはじまり。

ヨーロッパでの一人旅やアメリカでの生活など、多くの異文化に若い頃から触れてきた晴美さん。様々な場面でたくさんの人々に助けられた。その経験から、来日した人たちや、日本に移住してきた人たちに「日本に来てよかった」と感じてもらいたいと『国際交流クラブ原村』を立ち上げ活動が続けてきた。

昨年4月、20年の節目の年にクラブを閉じることにした。けれど現在も相互友好都市であるニュージーランドの「プケコへ」との交流は続いており、かつてのクラブのメンバーと、10数年前に「プケコへ」でホームステイした事があるメンバーなどが集まって、新たに「プケコへ交流委員会」を立ち上げた。

昨年初めて実際にプケコへを訪れる機会を得、20年間で築いた繋がりを強く感じ「この絆を大切に次の世代へ繋げていきたい。次へ繋げることができて初めて私の役目が終わるかな。」と話してくれた。プケコへとの交流では、多くをボランティアで担い、大変だったのでは？と訊くと「村から私に任せていただいて有難

いなといい方向に受け止めました。沢山の出会いに恵まれ、運営スタッフや地域の人々、家族の支えもあってやってこれた事に本当に感謝しています。」と振り返り、行政ではできない繋がりができた事を喜んだ。と同時に、次に繋げていく為にはボランティアのみではいけないという課題に直面しているという。

晴美さんは「外を見ることは、同時に内を見ること。自分自身や、自分の国と地域を知ることのはじまり。」と語る。

思いやりと関心を持って、お互いの良いところを見つけ、違いを楽しむことで生活はより豊かになること、多様性こそが豊かさだということを教えてくれた。

そして20年間の活動を振り返り、「私は本当に人に恵まれてるなあ。人に生かされていると思います！」と明るく喜々とした笑顔を見せてくれた。

*

そこに居るだけで周囲をパッと明るく照らす太陽のような晴美さん。その明るさは、常に相手を思いやる心と感謝の気持ちを忘れない姿勢が生み出している。